

参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学び Practitioner Narratives in English Education: Seeking an Insight into Teaching and Learning

坂本南美 (岡山理科大学) Nami Sakamoto *Okayama University of Science*

今井裕之 (関西大学) Hiroyuki Imai *Kansai University*

前田幸也 (兵庫県立大学附属高等学校) Koya Maeda *The High School of University of Hyogo*

岩本華苗 (九州大学) Kanae Iwamoto *Kyushu University*

Abstract

The purpose of this symposium is to seek crucial elements for fostering language learners through an overview of the narratives of the authors, and create an opportunity to develop professional teacher perspectives on language teaching and learning in the classroom. In the recent educational reform in Japan, new Japanese Courses of Studies for primary, junior high, and senior high schools have already been announced. These demonstrate the importance of a consistent educational essence in English instruction. In this symposium a university lecturer who has long experience of English teaching at public junior high schools, another university lecturer who has researched lesson practice in elementary schools, a high school teacher who has experienced several types of high school, and an English learner who studied under two of the presenters in her junior and senior high school days, narrate “English education” from their own standpoints. The triangulation of their narratives enables us to view the landscapes of language teaching and learning in the classroom. Understanding English education through their narratives gives us a different lens to view language teaching and learning in the classroom lives of teachers and learners.

1. はじめに

日本の英語教育は、小・中・高・大のつながりを持った教育を軸に、グローバル人材育成を目指した教育改革のさなかにある。日本国際教養学会第8回全国大会の公開シンポジウムでは、大学教員（今井）、中学教員の経験を持つ大学教員（坂本）、高校教員（前田）、中高時代に彼らのもとで英語を学んだ学習者（岩本）の4人が、それぞれの立場から捉えた小・中・高・大での英語教育について語り深めた。本稿は、シンポジウム開催に至る背景と当日発表および討論された内容報告を行うものである。まず、今井が小学校現場に関わる中で小学校での授業実践から見える問いを提案した。続いて、

坂本が英語教師の役割について触れながら、中学校や大学での授業実践から教室理解について探究した。前田は高校教員として、生徒の学習意欲を引き出す取り組みを紹介し、そこに根ざす自らの教えの理論について語った。最後に坂本・前田のもとで学んだ学習者の岩本から、中高での英語授業の学びの振り返りを基に、大学生となった現在の自分と英語との関係について語られた。教育改革のさなか、今後の英語教育の可能性を図るにあたって、本稿が一つのきっかけになることを強く願う。

2. 小学校英語教育に見る授業観の転換：授業研究者の視点（今井裕之）

2020年から始まる改訂学習指導要領の施行によって、その教育目標、教育内容、教育方法に至るまで、小中高での大きな改革が求められることになる。外国語科もその例外ではなく、小中高一貫性のある目標設定、指導方法、評価方法の具体的改革が提案され、学校教育現場は、2019年現在その改革前夜の準備に追われている。特に小学校ではこれまでの「外国語活動」が3,4年次に年間35時間、教科としての「外国語科」が5,6年時に年間70時間、合計210時間が実施されることで、検定教科書の採択、評価方法の整備、指導体制（ALTや専任教員の拡充）など、多くの課題に直面している。

見方によっては、大きな改革の波に晒されるなか、指針・方針の曖昧さに学校教員や教育委員会が戸惑い疲弊している面もある。一方で、本シンポジウムで語った授業研究者、授業実践者、学習者ら複数の多面的な「声」から読み取れるように、指導者と学習者がともに成長し Quality of Classroom Life (Allwright, 2003) をより良いものに変えていく「可能性」も持つことを、取組後の客観的データではなく、当事者の視点から「今を語る」ことを通して示してみたい。

2.1 小学校英語の継続的な授業研究を通して

1996年以来20年以上継続的に小学校英語教育の授業研究・支援を続ける筆者（今井）は、小学校教員が、英語教育を通して児童たちにどのように英語（外国語）と出合わせるか、英語を使う体験を意義あるものとして感じさせるか、そのためにどれだけ工夫や苦勞をしているかを見てきた。

2020年から実施される学習指導要領に示される資質・能力の3つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」は、外国語科でいえば「知識・技能」を一体化した指導をする（文法等を技能として生きて働く知識として指導すること、目的や場面・状況に合った言語活動をすることで「思考力・判断力・表現力」を育成すること、言語活動に粘り強く「主体的に学習に取り組む態度」を涵養することが、新たな課題として求められている。

小学校での英語授業においては、これらは筆者（今井）が小学校への授業参加を始めた頃から当然のこととして行われている。言語活動を中心にして言語を学ぶアプローチは、児童にとっての「今、ここ」での外国語の意義を大切にする先生がたの授業観によって生まれ模索されてきた。「今、ここ」に英語を使うべき必要性を先生が作り出すことによって、児童たちは「今、ここ」の必要性に応えようとして、教師にとっては思いがけない質問が飛び出すこともある。例えば、“What time do you go to school?” と尋ね合う活動の際に、ある6年生児童が「先生、それは学校に着く時ですか、それとも家を出る時ですか？」と質問し先生をたじろがせた。友達の問いに真摯に答えたいからこそその疑問であり、ドリル的な練習と考えていたならば考えつかない質問であろう（今井, 2019）。先生がたが、児童にとって聞いたり話したりする意義をもつ言語活動の目的・場面・状況を設定することに腐心し続ける成

果ではないだろうか。別の小学校で先生がたと指導案作成をしていて、“What’s this?”を「クイズ」以外の使用場面がないだろうか、長い間悩み続けたこともあった。「クイズくらいしか使用場面を思いつかない表現をなぜ授業で取り上げるのか？」という先生がたの強い思いがあつてのことだった。これらの事例が示すように、小学校の英語授業では「言語の使用目的・場面・状況」→「伝えたい意味」→「伝える言語形式（音声、文字）」の順に発想する言語活動を通して外国語に習熟させる授業展開が非常に多く、その展開は筆者が初めて参観した1996年当時の英語授業でも同様であった（今井, 1998）。学習者の「今、ここ」で、言語を使う場面をつくる授業開発を長年続けてきた歴史である。

2.2 小学校英語が中学以降の英語教育に何をもたらすか

今回の学習指導要領改訂では指導方法についても言及され「思考力・判断力・表現力」の指導においては(1)言語使用の目的・場面・状況を設定・理解し、(2)コミュニケーションの見通しをたて、(3)目的達成のためのコミュニケーション活動を行い、(4)活動の振り返りを行うことが提案されており、これに沿ったアクティブ・ラーニングが求められているが、小学校英語の授業ではこのような授業実践は典型的だと言ってもよいだろう。例えば、(1)「買い物などの場面状況下での会話活動」や「小学校6年間の思い出についてのポスター・プレゼンテーション」など、目的・場面・状況を定めて、(2)児童たちは自らの目標や計画を立て、(3)単元終末の言語活動を経て、(4)「振り返りカード」で自身の学びや気づき、今後の改善点を書き記す。中学、高校においても、タスクベースド、プロジェクトベースドと呼ばれるような、言語活動を中心とした言語習得を図る授業実践は増えつつある。3章以降で紹介される事例はその好例である。

中学、高校の授業観察・支援も行なっているが、小学校において、より重点がおかれていると感じるのが「活動後・活動中の振り返り」である。小学校での英語授業では、ほぼ当然のことのように取り組まれている活動であるが、中高で「振り返り」が頻繁に行われる授業はそれほど多くなく、その時間があれば先生の指導や言語活動に時間を割くことが多いように思われる（3章に中学校での振り返り例が紹介されている）。授業の最後に「振り返りシート」を書いたり、言語活動の途中で「中間振り返り・フィードバック」を入れたりする授業では、児童たちは自身の学習活動から改善点や気づきを見出す。例えば、小学校の思い出についてポスター・プレゼンテーションをする授業での出来事だが、発表後の質疑応答で、質問できずに戸惑った児童たちを集めて「中間振り返り」の話し合いを行い、聞きたい質問の英語表現を確認した後、再度発表を行い、その表現を使いながら質疑応答ができるようになっていた。「質問表現を教えたのだから、できて当たり前」との声もある一方で、「もう少しでできそうなのに苦しんでいる学習者を支援することで、できた実感を持たせることが大事だ」と「今、ここ」の大切さを指摘する声もあるだろう。このような、活動中・活動後の「振り返り」を起点として言語の学びの機会を創出する方法を、正統な学習と成長につながる指導と考えるのか、それともその場しのぎの助け舟と考えてしまうのか、「振り返り」の意義づけ、考え方が小中高ではまだまだ異なるように思われる。これまで「振り返り」の学習指導要領での位置づけは明確とはいい難かったが、今回「主体的に学習に取り組む態度」が「粘り強さ」と「自己調整」からなるメタ学習を含むものとして示されたことによって、「振り返り」がメタ認知を高め、粘り強く自己調整しながら学習に取り組む態度を育成する有用なツールとして位置づけられたと考えると、小学校の授業実践が、中学校および高等学校にも引き継がれ、小中高で一貫性をもって取り組まれるべき学習活動、教育課

題と言えるのではないかと思う。

英語の授業が、学習者同士が英語を通して「意味のやり取り」を行うことを目的とする場所だと再認識させてくれたのが、小学校の英語授業観察だった。学習指導要領の改訂が、小中高大の英語教育が、見通しをたて、活動してみ、振り返って深める学習方法への転換の追い風になればと思う。

3. 英語教師としての教えと学び—中学校・大学での授業実践より— (坂本南美)

本稿では、昨今の英語教育改革を背景に、英語を通して他者とつながることを目指した中学校での授業実践と学生が自らの学びをデザインする大学での授業実践を紹介する。筆者(坂本)は、大学に移るまでの20年以上、公立中学校の英語教員として教壇に立ってきた。そこで、ここではこれまでの実践を振り返る中で、英語教師の役割と言語教育の本質、英語教師の教えと学びについて探究したい。

3.1 自律的な学びを引き出す英語授業デザイン

学習指導要領で示された資質・能力の3つの柱「知識及び技能」「思考力判断力表現力」「学びに向かう力・人間性」について、各教科では、教科の特性を活かしながら、3つの柱を軸に、自律的に学ぶ生徒を育てる授業を目指していくことが重要な課題である。中学校での英語授業は、各レッスンに埋め込まれた新出文法を軸とした教科書に沿って展開する。その中で、「教科書を学ぶ」ことから「教科書で学ぶ」授業内容へと視点を移し、授業中の言語活動を通して自律的学習者を育てる授業デザインを目指す鍵として、教師が以下の5点を意識することは重要である。

1. 言語の学習は「インプット→インテイク→アウトプット」のスパイラルな循環だと意識する
2. 英語を使うための素材を持たせる
3. 授業の流れの中でできるだけ自然な場面・状況の設定を埋め込む
4. 「今、ここ」で英語を使って伝え合う相手への意識を持たせる
5. 授業中の場面ごとの教師の役割を意識する

3.2 授業の中での教師の役割

Raphael (2002) は、教師のコントロールの強弱と学習者のアクティビティの高低を指針に、教室の場面に応じた5つの教師の役割(直接的に指示を出す者、言語学習者のモデル、足場掛けをする者、ファシリテーター、参加者)を提言した。教師は、授業中のそれぞれの場面に応じて、生徒の学習の状況に合わせてこれらの役割を使い分けていく。その中でも、特に自律的学習者を育てる視点から、英語を媒介として生徒たちと他者や社会、世界との関係をつなぐファシリテーターとしての役割に注目したい。外国語学習は、高校入試や大学受験といった短いスパンでの目標もあるが、言語を学ぶ本質は、学習言語を媒介としてコミュニケーションを図り、他者とつながっていくことであると言える。そこに、学習者は、自分が生きているこの世界でその言語を使う意義に気づき、誰かとつながっていく喜びを見出し、そこからの学びを自分の中で内化させていくのではないだろうか。そのプロセスを生徒たち自らの中から引き出す(facilitate)役割も担いながら、教師は、「知識や技能の習得」と「他者とつながる力の育成」を両輪として目標に持ち、授業をデザインしていくのが望ましい。

3.3 実践より

ここでは、中学校に勤めていた時の授業実践と大学へ移ってからの教育実践を紹介する。授業や講義では、教室での様々な教師の役割を意識しながら、学習者が自らの学びの場面を創造できるような取り組みを目指している。

3.3.1 実践例①「海外への手紙」(中学校より)

中学2年生では、教科書の中で英文手紙のフォーマットを学ぶ。授業ではそれを基に、生徒がそれぞれに選んだ海外の著名人に手紙を出す活動を行っていた。“Dear ○○,” から始まり、“Sincerely yours,” の後、自分のサインで結ぶ英文手紙を書き終え、封筒には英語で横書きの宛名を書いて、それぞれに手紙を投函した。その中に、宇宙飛行士ニール・アームストロング氏へ手紙を送った生徒Fがいた。彼は部活動の帰り道など星を眺めるのが好きな生徒であった。ここで、ニール・アームストロング氏からの返事、正確には彼の甥から返事を受け取った生徒Fの心の動きを伝えたい。生徒Fは、この活動に取り組んだ初日の授業で、以下のように振り返っている。

「もし、ニール・アームストロングが僕の書いたこの手紙を読んでもくれたらと思うと、信じられないことです。本当に想像できないけど、読んでもらえるかもしれないと考えたら、しっかり書きたい。」(2012年1月13日 生徒Fの振り返りシートより)

その後、甥にあたる方からの返事が届き、生徒Fと一緒に英文手紙の内容を確認した。そこには、もうニールが返事を書けなくなってしまったこと、自分がニールの代わりに思いを伝えていること、世界の子供たちに宇宙への興味を持ち続けてほしいというニールのメッセージが書かれていた。返事が届いた時の生徒Fの振り返りシートには次のように書かれていた。

「返事が来たとき、本当に本当に嬉しかったです。返事がもらえるなんて思ってもみなかった。でも、手紙を読むと、ニールは体調が悪いとわかりました。心配です。」
(2012年3月2日 生徒Fの振り返りシートより)

授業では、生徒Fの手紙とアームストロング氏の甥の方からの返事の内容を紹介し、そのメッセージの意味や手紙を通じたこのご縁について話をした。クラスには他にも科学や天文学に興味のある生徒もおり、アームストロング氏について調べたりもしていた。その後、間もなくこの学年の生徒たちは3年生になり、6月にクラススピーチ大会を行った。その際の生徒Fのスピーチを以下に紹介する。

My dream is to be an astronomer. Astronomy is the work I long to do. I have two reasons. First, I watched a solar eclipse six years ago. Next, I found out about Mr. Neil A. Armstrong four years ago. He went to the moon first. I found out about him and felt emotional then. My dream was to be an astronaut at first, but my dream is to be an astronomer now because I want to look at the stars alone. For that reason, I need to study. I work hard at it, and I still want to go to the moon someday. Space is very mysterious, but I like space very much. Having a dream is very wonderful. I think that having a dream is very important. A dream is an aim.

My sister and I have aims, but my big sister doesn't have an aim, but this isn't strange. I think that you can have a dream from now on. I think it's good to have a small dream, too. Our lives make our dreams come true. I learned that dreams are important, so let's have dreams. They can come true. Never give up. Thank you for listening.
(2012年6月13日)

彼の心の中にニール・アームストロング氏のメッセージが残っていたかは推測の範囲を超えないが、スピーチでは、クラスメイトたちが真剣に彼の話に聞き入っていた。教室では、学んだ言語を媒介として他者と伝え合う中で得たものが、生徒たちの次の学びへの一步を踏み出す契機となることがある。それは、教師の想像の範囲を簡単に超えていく生徒たちの成長を目の当たりにし、彼らのその姿から教師としての学びを経験する瞬間の一つでもある。

3.3.2 実践例②「ティーム・ティーチングによる学生の模擬授業」(大学より)

ここでは、大学での実践として「英語科教育法」の授業における学生の模擬授業の様子を紹介する。この講義では、二人一組のペアを作り、中・高等学校での実践としてティーム・ティーチングを行う演習も取り入れている。学生は、事前に学習指導案を作成し、それに基づいた教材、ハンドアウト、PPTなどを仕上げた後、実際の授業を見立てて、生徒役となる他の学生を動かしながら、模擬授業実践を行う。学生たちの模擬授業の様子は録画し、後に授業場面ごとに録画映像を止めながら、授業発表者との学生とのディスカッションを行う時間を設けている。クラスメイトの生徒役の学生からのフィードバックを受け、学生Aは、振り返りシートに「教育現場観察実習で得たヒントも多数使用し、帯学習→thatの使用例→教科書内容→練習問題とつなげていくことができた。しかし、録画した自分の授業を見て、もう少し声を出そうと思った。今日はパワーポイントを使ったが、黒板ではどのように作るのかということも考えてみたいと思った。」とコメントした。高校時代までは生徒席にいた彼らが、今は生徒を育てる視点と英語の力を育成する視点を交差させ、試行錯誤を重ねつつ自己の力と向き合っている。

3.4 Quality of classroom life

中学生は心身ともに大きく成長する時期である。社会の縮図とも言われる学校生活の中で、様々なタイプの人がいることを知り、その中で友情を育んだり、ぶつかったり、夢中になれるものを見つけたり、自己について深く考えたりする。英語授業は、外国語学習を通して、言語を「媒介」としながら個の成長を助け、協働的な学びの中でクラス全体を成長させることを目指す空間でもある。そこでどのような授業を営むか。授業での教師の役割の中で、ファシリテーターも含め、場面に応じた役割を担っていたかどうかは、生徒の反応やその学びの様子から知ることになる。大学で教師を目指す学生との教育実践も含めて、教室での教師と生徒の教えと学びの意味を紐解く作業は、今後の英語教育を考える上で重要な側面だと感じている。Allwright (2003) は、教室での“puzzles”に向き合いながら営む授業に焦点をあて、“quality of classroom life”という概念を提唱した。私自身も教室に生きる者たちの日々の温かい関係の中で、「教えること」と「学ぶこと」のその営み自体が quality of classroom life を高めるのだと、実践者として、また研究者として学んでいる。

4. 高等学校における英語指導の実践（前田幸也）

本稿では、勤務校である兵庫県立大学附属高等学校での英語教育の現状を概観し、日々の授業で実践している取り組みやそれを支える筆者（前田）の考えや理論を示す。新学習指導要領が示す「知識・理解」「思考力・判断力・表現力等」「人間性・学びに向かう力等」の3つの柱は、これからの社会を生き抜く生徒たちにとって必要な力を育成するための指針となっている。その結果、現在では多くの高等学校で「アクティブ・ラーニング」や「4技能を意識した授業」が実践されている。私自身も「知識」に重点を置いた授業を展開していた時もあったが、生徒たちの理解度に疑問を覚えたことや、なによりも英語を学んでいて「楽しい」と目を輝かせる生徒は少なかったことで、様々な指導方法を模索し続けている。

4.1 英語教育の取り組み

現在、勤務している兵庫県立大学附属高等学校では英語表現、コミュニケーション英語、PS（Public Speech）の3つの授業を行っている。英語表現では主に文法指導を行っており、説明や問題演習が中心になりがちであるため、それぞれの文法事項に応じてスピーキング活動を毎回の授業で行うようにしている。コミュニケーション英語では教科書の英文を読み、内容を理解したうえで、音読活動を実施している。レッスンごとに指導方法を変える取り組みを行っており、retellingを中心としたレッスン、presentationを中心としたレッスンなど生徒の4技能を育成できるような展開を心掛けている。しかし、生徒に自分の考えをその場で表現する機会を多くは提供できていないところが反省点である。PSは本校独自の科目であり、1年生ではALT（Assistant Language Teacher）と共に日常会話の練習やrecitation、2年生ではpresentationやdebateといった活動を行っている。また、文化祭の一部として英語のみのイベントである「インターびーぷるday」を行うなど、積極的に生徒を英語にexposeする機会を与えている。

4.2 授業実践

ここでは私が取り組んでいる授業実践を紹介する。授業を行う上で根幹にある考えは「バランス」であり、「話す」「聞く」「読む」「書く」のバランスを重視している。また、「個人とグループ」「安定と流動」「思考と活動」「受動と能動」などの異なる要素を授業にバランスよく取り込み、その視点を授業に活かすことは授業における私の信念として常に意識している。

4.2.1 実践例①「単語遊び」

単語の確認は「テスト」という形で行われることが多いが、それゆえ生徒も飽きやすく、単調な作業になってしまう。しかし、ノートに新出語句を書かせる活動や口頭での練習、ペアやグループといった要素を単純な単語の確認と掛け合わせることによって、様々なバリエーションを産み出し、生徒にとって「単語を覚える」という作業が楽しいものになるような工夫を凝らしている。例えば、口頭で英単語でのしりとりを1分間で行うと、学力の高い生徒同士であってもstudent, tomato, open, new...など日常生活で使用する基本的な英単語が飛び交う。普段、教科書で見ている英単語はchemical, phenomenon, educate...などと抽象的なものや概念を表すものが多く含まれていても、活動がpassiveなものからactiveなものになれば語彙レベルは下がる。しかし、この活動を続けていると、中には逆の現

象が起きる生徒もおり、生徒が教科書で読んだ学びをすぐに他の活動で活用していく場面を目にするのは非常に興味深い。また、sentenceでのしりとり (I am a student. The book is interesting. など) を行うと使用する動詞のレベルや単数複数間違いなど、多くのことがあぶりだされ、生徒にとってのスピーキング活動のハードルの高さに気づく。それと同時に多くの生徒が四苦八苦しながら言いたいことを伝えようとする姿は、コミュニケーションの根底にある「伝えたい気持ち」を思い出させてくれる。

4.2.2 実践例②「Picture Description」

高等学校での英作文指導は通常、和文英訳や自由英作文などに分けて指導される。東京大学の2016年入試のAの英作文は、床に寝転んでいる猫をつまもうとする手が写っている写真が提示され、それを受験者がそれぞれに解釈して英語で描写・説明するものであった。その写真を表現する英語力はもちろんだが、受験者がその状況をどのように把握するかが大きなポイントとなる。つまり、目の前の状況をどう判断し、それをどう論理的に理解、説明するのか。東京大学はuniqueな捉え方や発想をする生徒を求めているのだろうが、そういった力は私も生徒には身に付けてほしいと考える。授業では、写真や映像を使い、状況を分かり易く論理立てて相手に説明する活動を行っている。例えば、アイパッドで画像を生徒に提示し、それを即興の英語を用いて口頭でペアの相手に説明させる。それを聞いた生徒が相手の説明を基にその絵を描く。以下はその例の一つだが、取り扱う内容自体にも、生徒にその絵の伝えたい意味を考えさせるものを含むように選択している。こうした活動で培われた能力が、その他に行うアウトカムの活動 (retelling など) に好影響を与えていると感じている。こうした活動を続けることで、相手に物事を正しく伝えることの難しさや愉しさだけではなく、自分の持っている固定観念を壊すような発見があれば、人間としての成長につながるものと信じている。

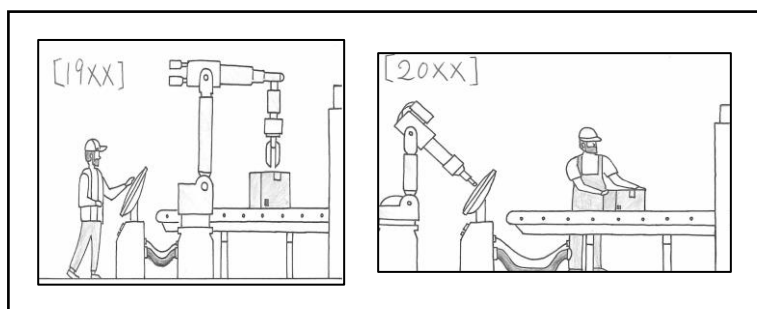


図1：英作文課題1 (生徒作品)

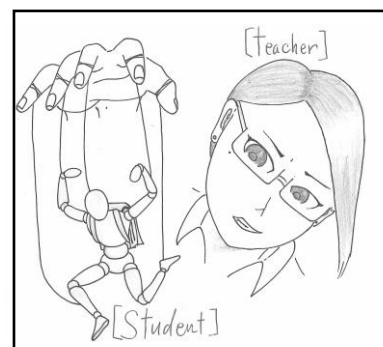


図2：英作文課題2 (生徒作品)

4.2.3 実践例③「Public Speech」

本校独自の教科であるPSでは、前述のとおり、ALTと共に会話や発表中心の授業を行っている。1年時にはrecitationを半年以上かけて行い、最終的には一人一人がクラスの前で発表を行う。クラス発表会を経て、選抜メンバーが、文化祭の一部である「インターピーぶるday」で全校生徒の前で発表するコンテストを行っている。2年時にはpresentationやdebateを行うが、debateでは希望者を募り、毎年冬に行われている兵庫県高校生ディベートコンテストに出場している。多くの生徒は当初、様々なトピックを扱う英語での会話に戸惑いを覚えているが、生徒に聞くとその原因の多くは「間違えるのがはず

かしい」「文法が間違えていると思う」という考えが根底にあるようである。いかに“Mistakes are OK!”という雰囲気を生み出せるかが、生徒たちの成長にとって大きな鍵であることは間違いない。そのために様々な方法が考えられるが、私は私自身が生徒の前で英語を積極的に話し、時には間違えても伝えたいことを伝える、という姿勢を示すようにしている。そうすることで教室内の質的向上を図り、生徒たちの積極性を引き出したい。

4.3 まとめ

授業を概観して捉えると、上記の活動はあくまでも「枝葉」である。これらの様々な活動を支えている「根幹」は、私の考える授業像や学び像によるところが大きい。どのような活動（結果）もそれを支える想い（原因）によって構築されなければならない。結果だけを闇雲に求めても、それは独りよがりの空虚なものになると感じる。授業は「イキモノ」であり、その時々で姿を変える。もちろん、それに対応すべく準備をするが、準備したものを出すだけではなく、いかに「その場」「その時」「その生徒たちとその教師」でしか生まれぬものに抗わずに、うまく繋がっていきけるかが大切だと考える。安定を求めながら、不安定をあえて選ぶ。そしてそれを楽しむ。そうした想いに支えられた授業をこれからも実践していきたい。現在でも新たな取り組みを試行錯誤しており、未だにベストな指導方法を見出せずにいるが、これは今後も教師を続ける限りずっと続くはずである。また、それと同時に、こうした考えに至らせてくれた、今まで関わった生徒たちや先生方に感謝したい。

最近では、授業で行ったアンケートがよい指針になった。「英語の授業の中で効果的だと感じる活動は何ですか」という質問に対して「shadowing」「retelling」など音声活動が大多数を占めた。確かに生徒たちはそうした活動の時にはキラキラしている。これらの活動の学習効果は多くの研究によって裏打ちされているが、生徒自身が効果的だという実感を持っているということが頼もしい。また、「授業内容は難しいが、楽しい」と答えた生徒も多く、「楽しさ」は学習の根底を支えているものであり、それをさらに追求したいという目標もできた。そうした中で、今、いわゆる偏差値に基づく進路指導や不確定な未来を生徒に示し、それに沿った生徒を育成しようとする現在の教育に疑問を抱いている。AI時代が到来すれば確かに答えを導くよりも「問いを立てること」のほうが重要になるとは感じている。しかし、その予想された未来に適した生徒を育てることは「はめ込み」ではないのかと自問している。先ほど述べた「その場」「その時」「その生徒たちとその教師」で作り上げられるその「瞬間」こそ、最も大切にしたいと思うからである。まだまだ、形にならないことのほうが多いが目の前の生徒を見守りながら、お互いに刺激しあい、自分の理想を少しずつでも体現していきたい。

5. 学習者が捉えた英語教育（岩本華苗）

本発表では、英語学習者から見た英語教育という視点で、ライフストーリーの中で筆者（岩本）自身が受けてきた中学校から大学までの英語教育を振り返るとともに、その学びが将来を考えるにあたってどのような影響を及ぼしたかという点について分析的にまとめた。

5.1 中学校・高等学校での学び

中学校での授業は、教科書による学習と並行して、創作活動やスキット、チャンツなどを多用し

た能動的参加型授業だった。これらのコンテンツを通じた協働的な学習からクラスの仲も深まり、英検の取得やテストの点数を競って切磋琢磨することで、楽しみながら英語学習へのモチベーションを保つことができた。また、授業にALTが毎回参加していたことは、ネイティブスピーカーの話方や発音を常に聞くことができる点、そしてネイティブスピーカーに褒められるという経験を通じて自信がついたという点で、大きな意味があったと思っている。このように、ALTとの会話や、前述のスタイルの日々の授業を通して知識のアウトプットを多く経験し、習った事を実際に使える嬉しさを感じていた。具体例としては、中学校二年生では世界遺産に登録された平泉についてのプレゼンテーションを行い、三年生では、**Dream Town**というお題で、理想の町について作文を書いている(図1, 2)。私は小学生の頃から日本史が好きなのだが、好きなことについて違う言語で表現することができるという楽しさも、継続して英語を学習するためのモチベーションを上げる一因であったと感じている。

平泉についてのプレゼンテーションでは、パワーポイントを使って奥州藤原氏を中心に平泉の歴史について紹介した。金色堂というお堂を表現する際に、どの単語を使えばいいか悩み、ALTに相談したところ、**palace**という単語をあててもらった。**Palace**はきらびやかな宮殿を表すイメージだったので、「金色に輝きながらもこぢんまりとしたお堂を、この単語で表すことができるのか」とまた悩んだが、他に良い単語が見つからなかった。私は英語の授業の課題として英作文等が課されると毎回日本の歴史や文化をテーマにしていたため、日本のものを英語で表現することの難しさも常に感じていた。

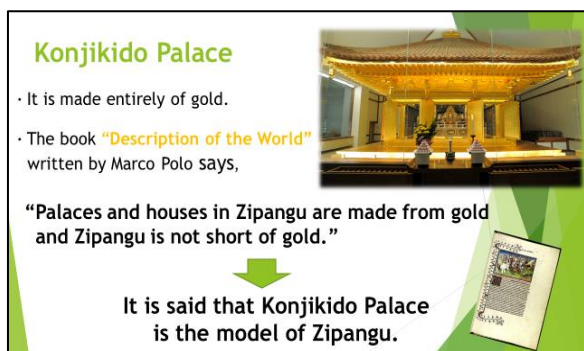


図1: “A Nice Place Like Hiraizumi”より



図2: Dream Town “Historical City”

Dream Townという活動では、生徒それぞれが自分の思い描く「理想の街」を創作して描き、それを英語でクラスに紹介するという事を行った。私は、歴史について知ることが好きだったので、各家にエレベーターがあり、そのエレベーターに乗って、行きたい時代を言うと、その時代を再現した街に行くことができるという内容を書いた。昔の日本にタイムスリップしてみたいという夢を英語で表現し、いろいろな想像をしながら作文するのはとても楽しかった。

高校の授業は大学受験のための準備という側面が強く、はじめは中学校での授業との違いに戸惑った。それでも中学校で常に行っていた「英語をアウトプットする活動」は意識して継続しており、スピーチに取り組んだり、ALTとの交換日記等を行ったりしていた。例えば、高校二年生の時には、兵庫グローバルリーダーキャンプという県が主催する英語キャンプに参加した。私達のチームは、どうすれば日本に来る観光客をもっと増やせるか、というテーマで調査を行った。調査にあたってはアン

ケートを作り、姫路城で外国からの旅行者に突撃インタビューをした。今振り返ってみると、全く知らない人に英語で話しかけるという、なかなか勇気がいる企画であったと思う。にもかかわらず、臆することなくインタビューができたのは、それまでに蓄積された英語をアウトプットしていく経験が自信になっていたのだと感じる。また、中高一貫校だったため、引き続き中学校からのクラスメイトと刺激を与えあっていた。皆が英語に一生懸命取り組む、「英語を勉強することが当たり前」という環境の中にいたことは、学びを続ける原動力になっていた。

このように英語と深く関わる中高時代を過ごしたが、大学では英語の授業がほぼなく、中学・高校時代のように周りに英語に積極的に取り組む人があまりいなかったため、入学してしばらくは英語から離れていた。しかし、それまで英語に毎日触れているのが当たり前だった経験から、本当にこれでいいのか、今までやってきたことが無駄になるのではないかと危機感を感じるようになり、英語の学習を再開した。その後は英語で議論するプログラムに参加したり、留学生のサポーターになったりもした。教師からのサポートがあった中学高校に対し、大学は自主的に英語に関わらなければ、学びを継続することが難しい環境だと感じている。そのような環境でも、中高での学びを無駄にしたくないという思いや将来へ向けた目標が、自分の中の学びに対する原動力になっている。

5.2 将来の職業につながる英語の学び

私自身のライフストーリーの中で英語に深く関わってきたこともあり、中学生の頃から漠然と、将来は英語を使って世界と関わる仕事に就きたいと考えていた。高校までは、「英語は海外の人と交流するときに役立つツール」という意識が強かったが、大学に入って将来を真剣に考える中で、自分の目指すキャリアにおいて、どれくらいの英語のレベルが求められるのかを意識するようになった。

そのような中、大学生になってから参加したプログラムの中で、海外の学生に英語で自分の意見を伝え、彼らと議論する機会があり、現在の自分の英語力はまだまだ仕事のツールとして使うところまで達していないと痛感した。中学・高校では、英作文やスピーチ等を通して、英語のアウトプットをする機会が多かったが、それはあくまで、実際に英語を使う疑似体験の場にとどまっていたように思う。海外プログラムでは、相手の意見を聞いて、自分の意見を組み立て、自分の考えていることを英語で瞬時に伝えることの難しさを初めて実感した。このような経験から、新たな目標として、英語でも自分の考えていることを、自分が満足する表現で、的確に伝えたいという気持ちが生まれた。

このように自ら学び続けられるのは、英語学習を楽しめるもの、習慣的なものとして抵抗なく捉えることができていること、また卒業しても良い影響を与え合う仲間が存在といった中学・高校時代に築いた「土台」があるからこそだと考えている。そのような土台を築くための様々な機会を提供して、いつもサポートしてくださった中学・高校時代の先生方には心から感謝している。英語は私にとって、生きる世界を日本にとどまらず、世界へと広げてくれる翼のようなものだ。日本語だけで生活していれば知ることができないことを知り、見られない景色を見ることができる。

卒業後の進路としては国家公務員を目指している。歴史を学んでいるときに感じた「先人のおかげで今まで続いてきた日本」を次の世代に繋ぐ仕事がしたいという思いと、世界と関わる仕事がしたいという思いをどちらも実現できる仕事だと考えている。日本を代表して他国とやりとりできる確かな英語力をつけられるように、これからも学びを続けたいと思う。

6. 終わりに

本シンポジウムでは、ナラティブ分析の結果を発表するのではなく、発表者自身の語りを参加者の皆さんに聞いていただくという試みを行った。ナラティブから物事の現状を客観的に知ることはできないであろう。しかし複数の立場の異なる発表者のナラティブやライフストーリーを重ねることで、英語教育実践の現実の一端を多面的に捉えることはできたかもしれない。学校教育に異なる関わり方をしてきた筆者たち4人が、シンポジウムの中で「自分と英語教育・学習との関わり」を語り、いわば自身の語りを研究の対象としたのは、そのような思いからであった。またその後、今回時を経て再度シンポジウムでの語りに、時を経た自身の思考の変化を重ね合わせて論文化することで、筆者たちが深く関わる小中高の英語教育に起こりうる（一部ではすでに起こっている）変革の可能性を示すことができたのではないかと思う。理論や理念、理想だけではなく、事実・現実（データ）だけでもない。英語教育・学習実践を経験してきた当事者たちのナラティブというフィルターを通すことで、現在および今後起こりうる英語教育の、より確からしい可能性を読者と共有できたこととしたらそれは筆者たちの喜びである。

引用文献

- Allwright, D. (2003). Exploratory practice: Rethinking practitioner research in language teaching. *Language Teaching Research*, 7(2), 113-141.
- Raphael, T. E., Pardo, L. S., and Highfield, K. (2002). *Book club: A literature based curriculum*. Lawrence, MA: Small Planet Communications.
- 今井裕之(1998).「小学校英語で変わる英語教育」水越敏行・村川雅弘(編著)『変わらなきゃ教育も』(pp. 58-63). 大阪: 三晃書房.
- 今井裕之(2019).「英語の学びとパフォーマンス心理学」香川秀太・有元典文・茂呂雄二『パフォーマンス心理学入門 共生と発達のアート』東京: 新曜社.